

九月五日（火）

「じゃあ、二九日はよろしく頼むよ」

向かいに座っていた哲朗は、自分のパソコンを触りながら頷いた。彼の隣に座っている上坂さんは、自分のスケジュール帳にペンで何かを書き込んでいる。

「浪川さんは来れないんだよね？」

哲朗は「彼女は、衣笠キャンパスなんで」と応えた。キャンパスが離れているとはいえ、まだまだ後期の履修登録の時期だろうに。茨木キャンパス組の彼らだけピックアップして、明子さんの誕生日パーティに連れていくのはなんとなく引つかる。

「じゃあ、これで上坂さんの一歩リードだ」

「でも、瑞希さん、明子さんに会ったことあるんでしょ？」

香織はコーヒーを自分のカップに注ぎながら、僕の後ろから声をかけた。僕は、少々驚いて、「え、そうなの？ 初耳なんだけど」と言った。

「え、知らない？ 随分前に本人から聞いた気がするけど」

香織は立ったまま一口飲んで、スツと自分の仕事に戻った。半ば事務員的に僕よりオフィスにいたことが多い彼女は、僕よりはるかに社内事情に通じているのかもしれない。

斜向かいの上坂さんの表情が僅かに曇った。

そんな話を微塵も出さなかった哲朗も哲朗だけど、水面下で情報共有もしてくれなかった明子さんも明子さんだ。信頼されているのか、いないのか、彼の後見人を今後も名乗るには自信がなくなってきた気もする。

哲朗は周りのことなど一切気にすることなく、自分のパソコンを見ていた。壁の時計を確かめて、「じゃあ、僕はもう出ますね」と腰を上げた。彼は自分の席に戻って、荷物を詰め始める。備え付けモニターの電源を落とす。

彼はカバンを肩にかけ、「今日はもう戻ってこないんで」とオフィスを出て行った。僕は一拍遅れて、その背中に「おう、了解」と言葉を投げた。

僕も自分の仕事に戻るべく、椅子から腰を上げる。上坂さんは同じ椅子に腰掛けたまま、スケジュール帳を脇に寄せてカバンの中を探っていた。

「次の打ち合わせまで、ここで作業しててもいいですか？」

言い方も声もいつもとなんら変わる様子もないのに、目つきや全身から正体不明の迫力が放たれているような気がする。僕はできるだけいつも通りに聞こえるよう、「ああ、どうぞ」と応えた。

「ありがとうございます」

表情はとても柔らかな笑顔なのに、背筋にゾクッと悪寒が走る。彼女は無駄のない動きで原稿用紙を取り出し、執筆用のペンを筆入れから出すと一つ一つマスを埋め始めた。頭が前に落ちて、少々丸まった背中から黒いオーラが漏れ出ているような気がする。

森田さんとの打ち合わせは、この後一五時から。まだ三十分少々、彼女はそこで書き続けるだろう。オフィスの端に設定した打ち合わせスペースから、目に見えない緊張感みたいなものが全体に拡がっていく。

僕は資料を自分のデスクに積み上げ、締め切っていた窓に手をかけた。

「クーラーついでるのに」

窓を大きく開けた僕に、香織は不満げな表情を向ける。僕は「換気だよ」と答えながら、最近の空調を信じて、窓をもう一つ開けてみた。

初出 令和三年一〇月一二日 カクヨムにて公開